

# 「自分の足で立つのよ」 緑内障で失明するも母の愛で“ソウルの神様”

映画・医療ライター 小<sup>こ</sup>守<sup>もり</sup>ケイ

「ママ、助けて！眼が見えない」。米国南部のジョージア州。貧しい黒人隔離村で暮らす洗濯女の7歳の長男レイは視界がぼやけて、家でも机や椅子にひっかかって転んでしまう。

すると母は彼を抱きしめ、「隠さずに言うわ。お前の眼は先生も治せない、失明するの」と告げる。レイは泣き出すが、母は「盲目でも馬鹿じゃないのよ」と励まし、視覚以外の感覚を使って生きる術を教え込む。

まず「玄関はどっち？階段は何段？」と手探りで歩く練習をさせ、次に、暖炉の火や沸騰している鍋、外を走る荷馬車などの音や匂い、温度、風向きなどから周囲の状況を感じさせる。

やがて虫が床を這う音から動く方向を読み取ったレイが虫をつかまえると、母は嬉し涙。そして「これからは読み書きを習うのよ」と、貧乏の中から遠くの盲学校に通わせる。

映画「Ray/レイ」は16回も米グラミー賞に輝いたソウル音楽の大御所で、日本ではサザンオールスターズのカバー曲「エリー・マイ・ラブ」でも有名な盲目のアフリカ系米国人歌手レイ・チャールズ（1930～2004）の半生記。厳しくも愛情溢れる母の教えを胸に、ハンディある人生を音楽で切り開くさまを描く。

## 子供の緑内障の特徴は“牛眼”

レイの失明は、画面では7歳の時に遭遇した弟の悲劇——一緒に遊んでいた弟が洗濯桶に落ちて溺死し、助けられなかったレイには心の傷になり、以後、この光景が事ある度にフラッシュバックしてくる——が誘因のように描かれている。しかし、心因性では視野狭窄はあり得るが失明までは起こさないで、先天緑内障が徐々に進み、丁度この時期に失明に至ったのだろう。

緑内障は、眼房水（血液の代わりに目のレンズや角膜に栄養素や酸素を運ぶ眼球内の液体）の排出が不調なために眼圧が高まり、圧迫さ

れた視神経が障害されて視野狭窄や欠損、視力低下が起き、放置すると失明する病気。成人では加齢とともに自覚症状なく進行し、40歳代以降では20人に1人が罹る失明原因第1位の病気だが、子供の場合は、生まれつき眼房水の排出路がつまっている先天緑内障。レイについても先天緑内障の特徴である“牛眼”——眼圧の上昇により角膜（黒目）が腫れて濁り、大きくなる——がはっきりと現れ、光をまぶしがり、涙や目ヤニも多く出ている姿が描かれている。



©2009 Universal Studios. All Rights Reserved.  
発売元：ジェネオン・ユニバーサル・エンターテイメント  
写真：（前）ピアノを弾き語るレイ  
（奥）幼い日のレイと母

## 映画「Ray/レイ」

テイラー・ハックフォード監督、2004年、米国

### “盲目の天才”の名の下、ストレスは大きく

盲学校で音楽の才を認められたレイは、卒業後プロになろうと17歳で単身シアトルに出る。クラブのバンドに職をみつけるが、ギャラを受け取るにもドル札の枚数を騙されたり、各地ツアーでも冷遇されたり苦労の連続。しかし、その音楽は“盲目の天才”と評判になり、19歳でレコード契約にこぎつける。

そして20代中頃にはゴスペルとリズム&ブルースを融合させた独自の音楽、ソウルを創り出し、人気歌手の座と幸せな家庭を手に入れる。しかし、その裏では盲目や音楽作りのストレスから麻薬と女性遍歴—握手の時に女性の手首をまさぐって見分ける—に溺れていく。亡き母の「心まで盲目にならないで」を思い浮かべ、やっと麻薬中毒を克服した時は35歳になっていた。

### 「わが心のジョージア」晴れて故郷に凱旋

79年、49歳のレイは、晴れて20年ぶりに家族を伴って故郷の地を踏む。公民権運動に賛同し黒人隔離のコンサートを拒否して以来、永久追放されていたレイに州議会が謝罪し、代表曲の「わが心のジョージア」を州歌に採用の上、彼の名誉を回復したのである。

映画は、T・ハックフォード監督がレイから聞き取った話を伝説の音楽やヒット曲の数々で伝えるもので、全篇に鳴り響くレイの歌声が観る者を圧倒する。レイを演じるのは、彼自身が指名したというJ・フォックス。ピアノの前で満面の笑

みを浮かべ、体をのけぞらせて歌う独特の身振りから魂までレイになり切り、05年アカデミー賞主演男優賞を獲得した。

### 大人の気付きが大事な先天緑内障

先天緑内障は近年、点眼薬か内服薬で眼圧を下げることができ、また、それが困難な場合も手術で治療できるようになった。乳児だと眼も柔らかく角膜の膨張も顕著、つまり牛眼が鮮明になるので分かりやすいが、3歳過ぎだと視力低下で初めて気が付くことが多い。いずれにせよ痛みを訴えないので、放っておくと失明することもある。周りの大人は、子供が光をまぶしがる、涙や目ヤニが多い時は注意が必要だ。

“盲目の黒人”の苦悩をソウルの叫びとして、音楽で世界を魅了したレイ。彼が数十年遅く生まれ治療の機会があったなら、視力を失うことも無かったはずだ。しかし、その時、彼の人生や音楽はどう変わっただろうか。

監修：東京通信病院 内科部長 <sup>みや</sup>宮 <sup>ざき</sup>崎 <sup>しげる</sup>滋

